



静脩

1984年1月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 20, No. 2

読書法雑感

数理解析研究所教授 広 中 平 祐

昔から読書のタイプとして精読型と乱読型の二つのタイプがあるといわれている。精読型と呼ばれる人は、これぞという少数の書物を選択して、それらを細部にわたるまで時間をかけて徹底的に読破し、必要なら繰り返し読んで自分のものとするという読書のタイプである。自分の知識の原点を確立して、そこから出発して色々の方向に知識を広げていこうという、いわば極座標方式である。これに対して乱読というのは、ちょっと言葉が悪くて自分の多読を卑下して言う場合もあるが、要するに手当たり次第読む型で、はじめから特定少数の本を厳選して読書本を限定することなく、興味の向くままにあれもこれもと一応通読しておいて印象に残った部分をひろっていき、その連鎖から総合的な視野とか自分自身の視点をさぐっていくという読書のタイプである。これを極座標に対比していえば、格子座標方式ともいえる。

一般的にいって理科系の人間には極座標方式の型が多く、文化系には格子座標型が多いように思える。勿論理科系の人間といっても、その枠の中でよくよく観察比較してみれば、その人が持って生まれた性格、少年時代の読書環境から身についた習性、また直面する研究課題の性質などによって、読書の型も千差万別であるといえる。

若い数学者、大学生や大学院生などを観察してみると、一般的に極座標型は早くから実質的でオ

リジナルな論文を書き始め、格子座標型はオリジナル論文を書き始めるのは遅いが何年かすると驚くような好論文をものにする大器晩成型が多い。数学者の中にも精多読ともいえるべき例外はまれにいる。

僕がフランスに留学していた頃の指導教官グロータンディーク（1966年フィールズ賞受賞）は精多読型の典型であった。彼はナチの収容所で親を失って单身パリにぬけ出して来たという伝説もあるユダヤ系の無国籍数学者だが、彼が代数幾何学に興味をもち始めてその分野を根底から自分流に書き直す作業にとりかかっている頃、僕は偶然の知遇を得た。パリのポアンカレ研究所の図書室で彼を見かけると、いつも日本流の鉢巻きをしめて読書に熱中していた。午後、彼の鉢巻き姿をみかけて、僕は僕なりの文献調べを終り街に出てコーヒー一杯ひと休みして図書室にもどってみると、グロータンディーク先生は相変わらず全く同じ姿勢で読書を続けていた。当時の彼は、その異才ぶりを誰もが認めていたとはいえ代数幾何学の分野では彼の論文は入門課題に関するものが多く、量の割りに質に乏しいという見方をする先輩数学者が少なかった。アブストラクト・ナンセンスの洪水だとかバブロの塔を築く男といった見方をする数学者もいた。彼は先輩代数幾何学者の論文をひとつひとつ精読し、それを批判し、自分流に書き直

すという作業に邁進しているかに見えた。読んだ論文の些細ともいえる欠点をこっぴどく批判することもあって、彼の数学に対する感覚を疑う先輩もいた。

あるときパリの街の喫茶店で、グロータンディークと先輩格のセールと三人でコーヒーを飲みながら数学談義に花を咲かせていた。セールは28才の頃フィールズ賞を受賞した天才数学者で、当時代数幾何学ではリーダー格の先輩だった。数学談義のあと、ふとセールが僕の方に向かって「広中、お前はグロータンディークのアブストラクト・ナンセンスをどう思う」と聞いた。あたかもグロータンディークを彼の面前でなじるような口振りに、未だ駆け出しの数学学生に過ぎぬ僕はとまどった。セールが立ち去ったあと、グロータンディークは僕に向かって「あと二年まってくれ。金の牛がやって来る」といって目を輝かせた。

後日談になるが、7年後彼がフィールズ賞を受賞したとき、その業績をたたえる講演を引き受け

たのは、そのセールだった。ちなみに僕の受賞のときの講演はグロータンディークが受持った。

読書の話にもどるが、本格的に始めから終りまで読む直読に対比して、読むともなく、どこからともなくページをめくっては瞑想にふけるといった方式の眺読ともいえる読書方式もある。

戦後食糧難のとき闇市売を一切拒否して栄養失調で43才の命を絶った数学者岡村博教授は、聞くところによると典型的な眺読タイプだったという。図書室より借りた本を机の上において読むともなく眺める読書だったというが、彼が「わかった」というときには本の内容に関する深い洞察に同僚達は目をむいたという。彼の業績には、その当時の常套手法から割りだせぬオリジナリティが光っており、早世が惜まれる。

ともあれ、読書には様々な型があるもので、どの型がどの型より優れているというものではないようだ。自分の性格にマッチした読書方式が、その人にとって最良であるといえる。

—— 資料紹介 —— ①

外国図書（大型コレクション）について

昭和57年度外国図書（大型コレクション）購入費により下記の資料を購入し、附属図書館に蔵置しておりますので御利用下さいますよう御案内いたします。

なお、この資料について文学部の梶山雄一先生に詳しい解説を執筆していただきましたので、御利用の手引きとして紹介いたします。

デルゲ版チベット大蔵経

文学部教授 梶 山 雄 一

今回（1982年度）、ダルマ出版社刊行の『デルゲ版チベット大蔵経』一部（117巻120冊）が本学附属図書館に購入され、本学のみならず、西日本のチベット学関係者に歓迎されるにいたったので、この書物について簡単な解説を行うことにする。

ダルマ出版社というのは、カリフォルニア州、バークレーにあるニンマ研究所附属の出版社である。「ニンマ」というのはチベットにおいて最古

の伝統をもつ仏教学派の名前「ニンマ派」からとったもので、この学派の出身である、タルタン・トルク・ラマが所長となって、教育・学術・文化にわたる広範な活動を続けているのがニンマ研究所である。

チベットの宗教と文化に対しては、古くから世界の言語学者や仏教学者は強い関心をもっていて、研究業績も積み重ねられてきている。しかし、とくに最近、チベット・ブームとさえいえる